東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

イタリア語とルーマニア語の語順について：語用論的視点からその無標性を探る

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2001-12-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Suzuki, Shingo
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/806

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

イタリア語とルーマニア語の語順について
——語用論的視点からその無標性を探る——

鈴　木　信　吾

1．はじめに

伝統的なイタリア語やルーマニア語の文法書は，それぞれが，語順の入れ換えの自由さを指摘しながらも[1]，その出発点となる基本の語順が設定できることを認めている。たとえば，Fornaciari は次のように述べている。

「イタリア語におけるもっとも一般的な統語法は，順序どおり（diretto）とされるもので，これによれば，主語の後には述語，その後には目的語が来る。そして，これら主要な各要素のすぐ後にそれぞれの補語が続く。これらの補語は属詞的なものでも副詞的なものでもよい」(Fornaciari, 1881, p.431。傍点は原文斜字体)。

いま，主語を S，動詞（Fornaciari の言う「述語」）を V，直接目的語を O と略すことにし，さしあたりは，これら主要語に組み込まれる属詞的（つまり形容詞的）ないし副詞的な付加語もそれぞれの一部に過ぎないと考えれば，イタリア語で「主語の後には述語，その後には目的語が来る」のが「順序どおり」とされる主要語の語順は，簡略化して SVO と書き直すことができる。

ルーマニア語の語順に関しては，GA『アカデミー文法』の一節を見ておこう。

「ルーマニア語におけるもっとも一般的な語順は，節の諸要素で拡大された主節の場合，次のとおりである：主語 — 属詞 — 述語 — 直接および間接目的語 — 状況補語。この語順は，動作の仕手から動作そのものへ，次いでその対象物へ，最後に動作が展開する環境へと，思考の論理的な展開に一致する」(Asan, 1963², p.428)。

イタリア語の場合と同じように話を主要語に限れば，「動作の仕手から動作そのものへ，次いでその対象物へ」という「思考の論理的な展開に一致する」語順とはやはり SVO である，と見なされていることがわかる。

ロマンス諸語で SVO を語順の基本とするという考え方は，言語類型論の立場からも一般に支持されてきた（たとえば，Renzi, 1984)。だが，近年，ルーマニア語に関しては，その反証

もあがっている（Renzi, 1991）。本稿では，イタリア語とルーマニア語の主節における語順を語用論的な角度でとらえ直しながら，その基本にある中立的な語順，すなわち，無標の語順を再検討してゆきたい。順序としては，まず，当該2言語でSとOとの文法関係を示すのにどのような語順が利用されているのかを概観し（第2節），次いで，使用できる文脈の範囲の広い文ほど語順が無標である可能性が高くなる，という原則に従って，両言語における無標の語順を探ってゆく（第3節）。そして，最後に，我々の得た帰結を，統語的に見た類型論上の帰結と照合してみる（第4節）。

なお，本稿では，SとOに同等の重きを置けるという利点にかんがみ，Vがいくつの名詞の項と結合するかという視点から文を分類することにする。1項動詞はSと，2項動詞はS, Oと結び付くのを典型とするから，それを中心に（しかし，それ以外の結び付きも射程に入れながら）考察を進めてゆこう。

2．文法関係と語順

2.1. イタリア語の2項動詞の場合は，次の例に端的に示されるように，SとOの文法関係を表すのにSVOの語順が使われる，と考えることにいささかの問題もない。

(1) La gallina vede la volpe.「ニワトリはキツネを見る。」

事実，下降調の，平叙文としてのふつうのイントネーションを保ったまま，意味のあいまいさや意味の逆転を引き起こさずに，勝手にSのla gallina「ニワトリ」とOのla volpe「キツネ」の各項を移動させることはできない。少なくとも，話し手と聞き手のあいだになんら共通の前提がない場合，たとえば突然話を切り出すような場合，ふつうのイントネーションで誤解を生ずる恐れのないのはSVOの語順のみである。

それでは，ルーマニア語の2項動詞に関してはどうであろうか。次の例(2)は，(1)に対応させてSVOの語順に置いたルーマニア語の文である。

(2) Găina vede vulpea.「ニワトリはキツネを見る。」

この文も，Şerbanが以下のように述べているとおり，SとOの各項を入れ換えると，確かに意味の逆転を引き起こしてしまう（S, V, Oに該当する引用文中の他の表現は，略語に統一して訳出する）。

「次のようなタイプの文を考えてみると，

Găina vede vulpea.［=(2)］「ニワトリはキツネを見る。」

ここでは，構成要素の意味も，形式で区別されるどんな標識も，［S, Oの］機能を判定する材料にはならないので，『SをOから区別してくれるただ1つのしるしは語順である』。

そこで，

S＝găina「ニワトリ」

V＝vede「見る」

O＝vulpea「キツネ」

と見なしたうえで，2つの名詞要素を入れ換えてみると，文の意味が変わり，SはOになり，OはSになる。それは，文中の3要素のあいだに，どちらの方向に向かっても両立する意味があるからである」(Şerban, 1974, pp.75-76。途中の2重かぎはGraur, 1960, p.22よりの引用だが，筆者が原典で確かめたわけではない)。

ただ，ここで注意しなければならないのは，次のFarcasの指摘にあるように，ルーマニア語の場合，Vを先頭に置いたVSOの語順でもあいまいさが生じない，という事実である。

「文が『ホットニュース』を伝える場合は，Sがテーマでないなら，語順はVSでもSVでもよい。

A fugit Popescu în străinătate!「ポペスクが外国に逃げた。」

Au invadat ruşii Afganistanul!「ロシア人たちがアフガニスタンを侵略した。」

これらの文はSVの語順でも同様に適格である。VSの語順が使われる場合は，Sは新情報でなければならない」(Farcas, 1981, p.258)。

すぐ上にあがっているルーマニア語の2例は，どちらもV（a fugit「逃げた」，au invadat「侵略した」）が先頭に置かれた文である。最初の文はVSに続く項がOではないが，Vが項を2つもつという点で，ここではVSOを示す第2の文と同列に考えてよい（このことについては，第3節（3.2）でもう一度触れる)。Farcasの言を待つまでもなく，VSOと並んで，もちろんSVOも「ホットニュース」として適格である。

次の(3)もVSOの文であるが，これは(2)のSVOの語順を入れ換えたものである。

(3) Vede găina vulpea.「ニワトリがキツネを見る。」

これも，(2)と同様，突然話を切り出すといった先行文脈の支えのない状況で，ふつうのイントネーションを保ったまま用いることができる。ここでも，găina「ニワトリ」がSでvulpea「キツネ」がOという解釈が成り立つのみである。なお，(3)に対応させて(1)の各要素を並べ換えたイタリア文は，特殊な文脈の設定がない限り使うことができないから，こちらは，文法関係を示すうえで明らかに有標の語順である[2]。

ここまで，我々は，特殊な文脈の支えがなくても（ふつうのイントネーションで）その文が使える，という語用論的な基準をよりどころに，S, Oの文法関係を表す中立的な語順を模索してきた。その結果，イタリア語の2項動詞に関しては，SVOの語順のみがそうした無標性をもつことを見た。それに対し，ルーマニア語の無標の語順の候補には，SVOとVSOの2つがあがることがわかった。両者のあいだにジレンマが生じる，と言ってもいいだろう。

2.2. さて，Benincà は，GGIC『参照用イタリア広文典』のなかで，文の有標・無標性について次のように述べている。

「文の有標性は，選んだ視点ごとに異なる方法で考察されてしかるべきである。事実，ある文が『語用論的に』無標であると言うとき，その文は，より多数の（理論的には無数の）言語文脈や場面で適格であり得ると解釈できる。それに対して，『統語論的に』無標である文とは，その文の構成要素の語順が，言語学理論の再建する言語構造のなかでもっている語順と合致する文のことである。［…］

統語論的ならびに語用論的な有標性だけが，語順を記述するのに関与する」（Benincà *et al.*, 2001, p.129）。

Benincà は，語順を記述する際に関与してくる有標・無標性に，統語論的なものと語用論的なものとがあることを指摘している。本稿は，第1節で述べたとおり，語用論的な角度から語順の無標性を模索してゆくことを中心的な課題とするが，ここで，少し視点を変え，統語論的な角度から，文の無標性がどのようにとらえられているのかを簡単に見ておこう。

イタリア語は，他のロマンス諸語と同様，明らかにSVO型の言語である。それは，例文(1)で見たように，この語順で文法関係が示されることからもわかる。ところが，ルーマニア語では，(3)が可能なことからも推測できるとおり，こうした文法関係の示し方自体がすでに微妙である。だから，最近の統語上の研究成果に，V先頭の語順を基本とする，という論証があがっていることは注目に値すべきだろう。1989年サンティアゴ・デ・コンポステラの国際ロマンス語学会でDobrovie-Sorinが報告した論証（Dobrovie-Sorin, 1994も参照）を受けて，Renzi（1991）は，ルーマニア語がVSO型言語であるとするこの説が，Greenberg（1963）の提唱する類型論上の予測にも数点で一致することを例証している。さらに，S表現のある非定形節も含めて，ルーマニア語の従属節における語順が，やはりV先頭の傾向を見せる，という事実をも考え合わせると，この説は十分に説得力があるように見える[3]。ここでは，この問題についてこれ以上吟味するつもりはないが，以下では，ルーマニア語が統語類型論的にVSO型に属すと仮定したうえで，語用論上の推論を進めてゆくことにする。

3．文の情報構造と語順

3.1. 先ほどのGGICからの引用箇所のなかで，Benincà が「ある文が『語用論的に』無標であると言うとき，その文は，より多数の（理論的には無数の）言語文脈や場面で適格であり得ると解釈できる」（Benincà *et al.*, 2001, p.129）と言っていたことを思い起こそう。このことから，我々は，文を語用論的な側面に照らした場合，使用できる文脈の範囲が広い語順ほど無標の語順としての可能性が高い，と判断することができる。この視点から問題をとらえ直すと，Antinucci と Cinque の2人が「新情報の広がりの原則（principio di progressione del

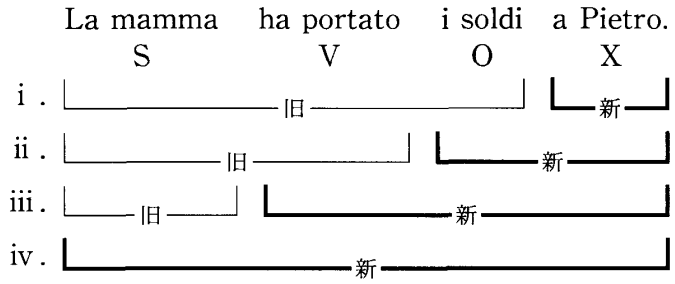
NUOVO)」という基準を設け，イタリア語の語順に関して，この原則の当てはまるものを最終的に無標の語順と見なしていることが注目される（Antinucci & Cinque, 1977, pp.124-134)。以下にその方法を瞥見したうえで，これをルーマニア語のSVO, VSOの文に応用したらどうなるか，を見てみよう。

すでに，我々は，イタリア語がSVOを無標の語順とするのを見た。ここでは，SVOにもう1項加えた3項動詞の文を例にとって，その文に「新情報の広がりの原則」がどのように当てはまるかを見てみよう。Vがもつ項のうち，S, O以外のものを仮にXとすると，Salvi & Vanelli（1992, p.177）から引いた次の文では，間接目的語（alla mamma「お母さんに」）がそのXに当たる。

(4) a. Piero ha regalato il libro alla mamma.「ピエーロはお母さんに本を贈った。」
　　b. Piero ha regalato alla mamma il libro.

Salviは，(4)の例のようにO（il libro「本」）が単に定冠詞を伴うに過ぎない場合，ふつうのイントネーションではSVXOの語順は使えないとして，(4)bの文に容認不可能性を示す星印を施している[(4)(5)]。一方，(4)aのSVOXの文は突然の発話に耐えられるので，こちらが3項動詞文の無標の語順だと言える。ふつうのイントネーションを伴うイタリア語の平叙文は，旧情報が新情報に先行するのを原則とするから，上の(4)aや下の(5)のように中立的なSVOXの文では，旧・新の情報が次の図のようにさまざまな分布を示し得る，と考えられる[(6)]。

(5) La mamma ha portato i soldi a Pietro.「お母さんはピエトロにお金を持って来た。」



(5)の文が上図iのような情報構造をもち得るのは，たとえば，(6)iのような先行文脈を想定することによって確認できる。

(6) i. A chi ha portato i soldi la mamma?「お母さんは誰にお金を持って来たのか？」

この問いは「お母さんが誰かにお金を持って来た」のを前提としており，SVOを旧情報にしながらX（a Pietro「ピエトロに」）を新情報として求めるものだから，(5)の文がその答えとして適格なら，(5)iに図示したような旧・新の情報の分布が可能であるということを意味する。同様に，(5)ii-ivの可能性も，それぞれ，対応する(6)ii-ivのような先行文脈により確かめることができる。

(6) ii. Che cosa ha portato la mamma?「お母さんは何を持って来たのか？」
iii. Che cosa ha fatto la mamma?「お母さんは何をしたのか？」
iv. Che cosa è successo?「何が起こったのか？」

なお，無標の語順の文は，先行文脈の支えなしで，突然話を切り出そうというときにも用いられるが，これも（(5)ivのように）文全体を新情報としてもてることの証しである。

一方，(5)の文は（イントネーションを含め何らかの特殊な操作でも施さない限り）(7) a-cの各問いに対する答えにはならない。

(7) a. —Chi ha portato i soldi a Pietro?「誰がピエトロにお金を持って来たのか？」
—*La mamma ha portato i soldi a Pietro.
b. —Che cosa ha portato a Pietro la mamma?「お母さんはピエトロに何を持って来たのか？」
—*La mamma ha portato i soldi a Pietro.
c. —Che cosa è successo a Pietro?「ピエトロはどうしたのか？」
—*La mamma ha portato i soldi a Pietro.

これらの問いはそれぞれ下線の部分を新情報として求めるはずのもので，(5)がその答えとして適格でないのは，新情報を無理に旧情報の前にもっていこうとした結果である，と考えられる。このように，ふつうのイントネーションを保つ限り，情報を旧から新への流れに逆行させることはできないのである。

(5) i -ivの図からわかるとおり，SVOXという無標の語順の文では，もしSが新ならVOXも必ず新の情報でなければならないし，また，Vが新ならOXも新，Oが新ならXも新の情報でなければならない。翻ってこれを文末から見れば，無標の語順の文では，新情報は文頭に向かって順にその分布の領域を広げてゆける，ということになる。これがAntinucci & Cinque（1977, p.130）の言う「新情報の広がりの原則」である。

それでは，この「新情報の広がりの原則」を無標の語順の可能性をもつルーマニア語の文で検討してみたらどうだろうか。我々は，すでに(2), (3)の例から，ルーマニア語の2項動詞の文がSVO, VSOともに特殊な文脈の設定なしで使えるのを見た。これは，言い換えれば，いずれの語順でも文全体が新情報になり得るということだから，両方とも新情報の領域が文頭まで広がる可能性を秘めている，と考えることができる。さて，実際には，どのような結果が得られるのであろうか。次の例では(8)のaがSVO，bがVSOに置かれている。

(8) a. Ion a spart vaza.「イオンは花瓶を割った。」
b. A spart Ion vaza.

SVOの語順をとる(8) aの文は，次の(9) i -iiiの問いに適格に答えることができる。

(9) i. Ce a spart Ion?「イオンは何を割ったのか？」
ii. Ce a făcut Ion?「イオンは何をしたのか？」
iii. Ce s-a întâmplat?「何が起こったのか？」

(9)の i は O（vaza「花瓶」），ii は O と V（a spart「割った」），iii は O と V と S（Ion「イオン」）をそれぞれ新情報に求める問いだから，それに答えられる(8) a のような SVO の文は「新情報の広がりの原則」に当てはまる，と言える。

一方，V 先頭の(8) b の文は，次に見るとおり，(10) i -iii の一連の問いに対していつも一定の適格さで答えられるとは限らない（下線部が新情報の部分に相当する）。

(10) i. —Ce a spart Ion?「イオンは何を割ったのか？」
—*A spart Ion <u>vaza</u>.
ii. —Cine, ce a spart?「誰が何を割ったのか？」
—??A spart <u>Ion vaza</u>.
iii. —Ce s-a întâmplat?「何が起こったのか？」
—<u>A spart Ion vaza</u>.「イオンが花瓶を割った。」

(10)の一連の検査から，(8) b のような VSO の文には「新情報の広がりの原則」が当てはまらないことがわかる。したがって，ルーマニア語の 2 項動詞文に関しては，V を 2 番目の位置にもつ SVO を無標とする，という結論に落ち着きそうである。これは，ルーマニア語を統語類型論的な観点から VSO 型と仮定したのとは反対の結論である。

ルーマニア語では，O の指示物が人間［+human］でかつ定［+definite］である場合，O に pe（という O の標識）を付けたうえで，接語代名詞（次の例では斜字体で示す l-「彼を」）によってそれを2重化する現象がある。(11)の a は SVO，b は VSO の例。

(11) a. Mama *l*-a certat pe Ion.「お母さんはイオンをしかった。」
b. *L*-a certat mama pe Ion.

(11)の a，b に関して得られる結果は，それぞれ，(8)の a，b に関して得られる結果と合致する。つまり，接語による2重化を見せる文も，SVO の方に「新情報の広がりの原則」が当てはまるという帰結に落ち着くわけである[7]。だから，ルーマニア語の2項動詞文は，(11)a のような構造の文も含めて，語用論的には SVO を無標の語順とすると言える。

SVO の後にさらにもう 1 項 X を加えても，結果に変わりはない。ここでは，X が間接目的語（(12)の Mariei「マリアに」，(13)の părinților「両親に」）の例をとりあげよう。ルーマニア語では，間接目的語にも接語代名詞（(12)に斜字体で示す i-「彼女に」）による2重化の現象が見られるが[8]，それでも結果はいっしょである。

(12) a. Tata *i*-a adus bani Mariei.「お父さんはマリアにお金を持って来た。」

b. *I*-a adus tata bani Mariei.

(13) a. Maria l-a prezentat pe Petru părinţilor.「マリアは両親にペトルを紹介した。」

b. L-a prezentat Maria pe Petru părinţilor.

(12)の a，b の対を例にとると，a の SVOX の文は，イタリア語の(6) i -iv に対応する次の一連の問いに対し，答えとして適切である。

(14) i . Cui i-a adus bani tata?「お父さんは誰にお金を持って来たのか？」

ii . Ce a adus tata?「お父さんは何を持って来たのか？」

iii. Ce a făcut tata?「お父さんは何をしたのか？」

iv. Ce s-a întâmplat?「何が起こったのか？」

一方，(12)b の VSOX では，文末の X を新情報に尋ねる問い(14) i に対してもまともに答えられない。(13)に関しても同様の結果が得られる。VSOX に「新情報の広がりの原則」が当てはまらないのだから，X が加わる加わらないに関わらず，SVO を語用論上の無標の語順とする結果には変わりがない。繰り返しになるが，こうした結果は，ルーマニア語を統語類型論的な観点から VSO 型とした仮定とは食い違う。

3.2. これまで，語用論的な視点から語順の無標性を検討するに当たり，2 項動詞と 3 項動詞に照準を合わせてきたが，1 項動詞は度外視してきた。これから，さらに 1 項動詞を土台に考察を進めるが，その際，もし突然の発話に耐えられるような無標の語順の候補が 1 つしかあがらない場合は，「新情報の広がりの原則」を待つまでもなく，その候補がそのまま無標の語順の文だと即断できると見なすことにする。なぜなら，「広がりの原則」の当てはまる文とは，新情報が文末から文頭まで全体にゆき渡る文にほかならないからである（鈴木，1986, p.117, 注 6 参照)。

さて，1 項動詞を度外視してきたのには，それなりの理由がある。とりわけイタリア語において顕著に現れることだが，SV，VS のどちらが好まれるかの判断は，話者ごとに微妙な揺れを示すことが多いからである。両者とも同等に適格だという判断が下されることもよくある。イタリア語においては，（統語上，S が O の位置で生成されるという）非対格動詞の文でも SV の語順の方が安定していると判断される場合もあるし，逆に，非対格動詞以外の自動詞なのに VS に軍配が上がる場合もある。

(15) a. Giovanni è partito.「ジョヴァンニは出発した。」

b. È partito Giovanni.

(16) a. Giovanni ha telefonato.「ジョヴァンニは電話した。」

b. Ha telefonato Giovanni.

(15)は非対格動詞（è partito「出発した」），(16)はそれ以外の自動詞（ha telefonato「電話した」）を使った例であるが，イタリア語を母語とする言語学者たちによると，(15)ではaのSVの方が，(16)ではbのVSの方が，それぞれすわりがよいという（Lepschy & Lepschy, 1998[4], p.146 ; Benincà *et al.*, 2001, pp.137-139 ; Salvi & Vanelli, 1992, pp.176, 178-179）。これは，統語的な立場から期待される語順とは裏腹である。このように「混沌とした」とも言える状況にあるので，少なくともイタリア語においては，1項動詞は無標の語順を検討する際の最終的な判断の材料にはならない，と考えた方がよい。

ルーマニア語の1項動詞もこれに近い状況を示すが，今回調査した限りでは，SVが適格なところでは必ずVSも（それと同等かそれ以上に）適格で，その逆はない，つまり，SVの判断が話者により揺れるところでも，VSはいつも適格性を保つ，という結果を得た[9]。したがって，VSを無標の語順と見なせる傾向にはあるらしい。この傾向は，（統語類型論的な仮定の裏づけにはなるかもしれないが）2項・3項動詞に関して得られたV 2番目の結果とは相容れない。

傾向に多少の差はあるにせよ，両言語とも，話者による1項動詞文の安定性に関する判断が，SVとVSとのあいだで揺れ動きがちであるのを見た。次の(17)はイタリア語，(18)はルーマニア語の1項動詞文の例であるが，これもやはり例外ではない。

(17) a. Pucci è fuggito.「プッチは逃げた。」
　　b. È fuggito Pucci.
(18) a. Popescu a fugit.「ポペスクは逃げた。」
　　b. A fugit Popescu.

事実，(17)，(18)ともに，aのSVの系列は「Sが何をしたのか」に答えられ，bのVSの系列は「誰が逃げたのか」に答えられるのに加え，a，bの両系列がさらに「何が起こったのか」にも適格に答えられる。おおざっぱに見て，どちらの系列にも「新情報の広がりの原則」が当てはまると言える。

ところで，鈴木（1986, pp.111-113）では，イタリア語の1項動詞にもう1項X（次の例では場所の補語 all'estero「外国に」）を加えると，歴然としてSVXが突然話を切り出すのにふさわしくなる，ということを例証した。

(19) Pucci è fuggito all'estero.「プッチは外国に逃げた。」

事実，(17)bのようなVSの文では，次のようにXをどこに付け加えようと，突然の発話として奇妙である。

(20) a. È fuggito Pucci all'estero.
　　b. È fuggito all'estero Pucci.

c. All'estero è fuggito Pucci.

それでは，⒅のルーマニア文に同じ場所の補語 X（în străinătate「外国に」）を加えて，2項動詞の文にしたらどうだろうか。

⒇ a. Popescu a fugit în străinătate.「ポペスクは外国に逃げた。」
b. A fugit Popescu în străinătate.

⒇a は⒅a に X を付けた SVX の文，⒇b は（イタリア語の⒇a に対応させて）⒅b に X を付けた VSX の文であるが，両方とも「ホットニュース」として全文が新情報を担うことができる（⒇b は Farcas, 1981, p.258の例）。したがって，状況は少しイタリア語とは異なる。が，いずれにしても，最終的には SVX の⒇a にしか「新情報の広がりの原則」が当てはまらない，という点では同じである。事実，⒇a は，㉒の一連の問いに対して適格な答えとなる。

㉒ i . Unde a fugit Popescu?「ポペスクはどこに逃げたのか？」
ii . Ce a făcut Popescu?「ポペスクは何をしたのか？」
iii. Ce s-a întâmplat?「何が起こったのか？」

これに対し，⒇b は，X を新情報に求める㉒ i にも適切に答えることができない。要するに，1項動詞にもう1項 X を加えた場合も，文が O を伴う(8)や(11)の場合と同様，語用論的には V 2番目の SVX の方が語順の無標性を示すのである。

加えられる X が間接目的語（次の㉓，㉔では al presidente と preşedintelui「大統領に」）であっても結果に変わりはない。㉓はイタリア語，㉔はルーマニア語の，それぞれ a が SVX，b が VSX の例である（㉓は⒃に X を加えたもの）。

㉓ a. Giovanni ha telefonato al presidente.「ジョヴァンニは大統領に電話した。」
b. Ha telefonato Giovanni al presidente.
㉔ a. Ion i-a telefonat preşedintelui.「イオンは大統領に電話した。」
b. I-a telefonat Ion preşedintelui.

ここでも，イタリア語で突然話を切り出すのに使えるのは㉓a の方だけである。一方，ルーマニア語では，㉔a, b がともに「何が起こったのか」に答えられるが，文末から新情報の領域を広げてゆけるのはやはり㉔a の方だけである。㉔b では X を新情報に求める「イオンは誰に電話したのか」にも満足に答えられない。したがって，結果的には，どちらの言語においても，V 2番目の SVX が（SVO と並んで）語用論上無標なのを再確認することになる。

3.3. 1項～3項動詞でできたイタリア語とルーマニア語の主節について，その旧・新情報の分布状況を見ながら，無標の語順を模索してきた。ここで，その結果をまとめておこう。

イタリア語においては，1項動詞を使った文はSVとVSとのあいだで微妙な均衡を保っている，とでも言えそうな状況を見た。ただ，項が1つふえると，それがOであろうとXであろうと，全文が新情報を担えるのはV 2番目のSVO，SVXに限られることも見た。つまり，イタリア語2項動詞文の無標の語順は，「新情報の広がりの原則」を待つまでもなく1つに絞られてくる。3項動詞のSVOXの文にしても，その延長線上にあると言えよう。このような語用論上の帰結は，イタリア語を統語類型論的にSVO型の言語と考えるならば，ある程度予測のつくことである。

ところが，ルーマニア語では，そのVSO型の予測とはむしろ裏腹の結果を得てしまう。なるほど，1項動詞の文は，SVとVSとのあいだの微妙な均衡をわずかに破るように，V先頭のVSが好まれる傾向が現れる。しかし，項がもう1つふえると，V先頭のVSO，VSXだけでなく，V 2番目のSVO，SVXも全文が新情報になれることを見た。この食い違いは，「新情報の広がりの原則」を考えてみた場合，さらに大きくなる。この原則が当てはまるのは，予測とは裏腹のSVO，SVXの語順のみなのである。3項動詞文もその延長線上にあり，SVOXの語順の方が無標性を示す。

4．ルーマニア語のV先頭とV 2番目の文——むすびにかえて

Gebertは，中立的な語順つまり無標の語順の文について，複数の言語における情報構造を検討した結果，以下のような結論を導き出している。

> 「以上のことから，スラヴ諸語やロマンス諸語［…］は中立的な語順によって次の2つの情報価値を表すのだ，という結論が得られる。その1つは，Sが構造上のテーマだという価値，もう1つは，文全体が文脈上で新情報だ［…］という価値である」(Gebert, 1988, pp. 144-145)。

我々は，これら2つの情報価値のうち，後者すなわち文全体が新情報だという価値を踏まえながら，さらにその幅を広げた「新情報の広がりの原則」をよりどころに，イタリア語とルーマニア語の無標の語順を探ってきた。そのゆき着いたところは，Gebertのあげるもう1つの情報価値を確認する結果となった。両言語とも，2項・3項動詞はV 2番目を中立的な位置とするから，文頭の位置はテーマ（つまり，これから何について述べるかを言う部分）に打ってつけの要素Sに割り当てられる，という確認である。これによりSのテーマ性が保証される，と言ってもいいだろう。

すでにFarcasからの引用で見たように，ルーマニア語においては「文が『ホットニュース』を伝える場合は，Sがテーマでないなら，語順はVSでもSVでもよい」(Farcas, 1981, p.258。傍点は筆者）と言える。「Sがテーマでないなら」という制約に連動して「VSの語順が使われる場合は，Sは新情報でなければならない」(ibid.）という制約も加わる（たとえば，

⑽ i の答えが，S（Ion「イオン」）が旧情報になってしまうため適格性を欠くのを参照)。イタリア語の場合と違って，ルーマニア語のV先頭の文は，項がいくつであろうと，確かに全体が新情報になり得るが，これらの制約からわかるとおり，その使用できる文脈の数は（V 2番目の文に比べて）やはり少ない。

イタリア語では，SVOという統語類型論上の無標の語順が，概してそのまま語用論上に反映しているようだが，それでは，ルーマニア語をVSO型言語とする立場をとった場合，語用論的な視点から見るとSVOの方が無標性を示すという結果は，どうとらえたらよいのだろうか。これを考えるうえでのヒントになりそうなのが，中世ロマンス諸語の統語構造である。Vanelli, Renzi & Benincà（1985）によれば，中世ロマンス諸語はSVO型に属すが，主節では，これがそのまま現れることはなく，まずVが文頭に置き直された形で出てくる，という。このV先頭のVSOを出発点として，文にテーマづけをしたい場合は，SなりOなりの1要素がVの前に出される，というのが彼らの仮説である。Sがテーマに打ってつけの要素なら，語用論的に見た中世ロマンス諸語の無標の文がSVOだったであろうことは容易に察しがつく。VSOを出発点としながらも，Sをテーマにした SVOの構造を組み立てて，語用論上はこれを中立的な語順とするという現象は，そのまま現代ルーマニア語にも通用しそうである。もちろん，我々は，現代ルーマニア語の文構造が，中世ロマンス諸語の主節の構造をそのまま引き継いだものだなどと言うつもりはない[10]。ただ，文構造のタイプとして類似した点があるということを指摘するにとどめておきたい。

（本学教授＝イタリア語担当）

注

(1) このような語順の入れ換えが，どのような意味でどの程度まで自由なのかについては，鈴木(2000）でイタリア語の場合を論じた。

(2) 本文の例(3)に対応させてイタリア文(1)の要素を配列し直すと，次の(i)が得られる。

（i）Vede la gallina la volpe.

（i）は，たとえば，誰かがニワトリを見るのがわかっており，その誰かを求める問い(ii)のような先行文脈が用意されて初めて使用が可能になる。

（ii）—Chi vede la gallina?「誰がニワトリを見るのか？」

—Vede la gallina la volpe.（＝（i））「キツネがニワトリを見る。」

このように，（i）はある特別な文脈の設定があれば使うことはできるが，その場合でも，la volpe「キツネ」の方がSであり，la gallina「ニワトリ」をSとする解釈は成り立たない。つまり，ルーマニア語の(3)になぞらえてVSOの解釈を成り立たせようとする試みは，イタリア語にとっては無理だと言える（Motapanyane, 1989, p.86も参照)。

(3) 従属節に中立的な語順が現れやすいことについては，Vanelliが次のように言っているのを参照のこと。

「変形が起こるときに制約を受けることの少ない主節に比べると，従属節は統語上の基本構造

というものをより忠実に反映している，と考えられる」(Vanelli, 1986, p.267)。

現に，Vanelli, Renzi & Benincà (1985) は，ドイツ語をSOV型とする分析に着想を得て，中世ロマンス諸語の基本構造は従属節にしか現れない，という仮説を立てている。

(4) 文(4)bを容認不可能とするSalviの見解は，いささか極端の嫌いがある。E. Lombardi Vallauri (の私信) によれば，これは(4)aとの比較のうえでの容認可能性の低さと解釈すべきであろうという。いずれにしろ，(4)bが(4)aに比べてすわりが悪いのは間違いない。

(5) 特殊なイントネーションに切り替えることで，(4)bの容認可能性は増す。これは，別の見方をすれば，特殊なイントネーションを必要とする文を考察の対象に入れると，無標の語順を検討しようとする際の障害になる，ということでもある。したがって，これより以後，語順の無（あるいは有）標性を問題にする文に関しては，(特にそれと指摘がない場合でも）すべてふつうのイントネーションが与えられたものとして考えられたい。

(6) 「旧情報」とは，文脈からあらかじめ聞き手が知っている（と話し手が判断する）情報，逆に，「新情報」とは，聞き手に初めて伝わる情報のことである。ただし，「旧・新情報」の解釈は，実は，細かい点で研究者ごとに微妙なずれを示すことがわかっている (Prince, 1981を見よ。Suzuki, 2001予定，注7も参照のこと)。が，本文の以下の考察においては，そのような細かいずれが帰結に大きく影響するようなことはない。

(7) Gierling (1997, pp.63-67) によれば，Oを接語で2重化する文は，特殊なイントネーションを帯びない限り，新情報が広がりを見せることがないという。我々の調査で得られた結果は，これとは異なり，本文の例(11)に関して述べたとおりである。いずれにしろ，イントネーションも含めたさらに綿密な調査が必要であろう。

(8) Vの後に項が複数ある場合には，接語で2重化できるのはそのうちの1項だけである (Manoliu-Manea, 1990, p.190参照)。したがって，(13)の例文では，O (pe Petru「ペトルを」) がl-「彼を」で2重化されている反面，間接目的語のX (părinţilor「両親に」) には2重化が認められない。

(9) ルーマニア語について我々が行なったインフォーマント・チェックは，数人を対象にしたに過ぎない。状況が本文に述べたとおりなので，確実な結果を得るためには調査対象の人数を増やすことが不可避である。したがって，被験者数をさらに広げた調査は今後の課題としたい。

(10) Niculescu (1991) は，16-18世紀のルーマニア語テクストのなかに，教会スラヴ語をモデルにしたV文末の語順も混在していることを示したあと，次のように結んでいる。

「ルーマニア語は，ここでもまた，ロマンス諸語全体のなかで別格の，あやふやで複雑な状況を示している」(Niculescu, 1991, p.197)。

語順を通時的に考える際に，ルーマニア語がさらされていた特殊な状況はいつも念頭に置いておくべきだろう。

参考文献

Antinucci, F. & G. Cinque (1977) : "Sull'ordine delle parole in italiano ; l'emarginazione". *Studi di grammatica italiana*, 6, pp.121-146.

Asan, F. (1963²) : "Ordinea cuvintelor şi a propoziţiilor". GA, 2, pp.428-467.

Benincà, P. *et al.* (2001) : "L'ordine degli elementi della frase e le costruzioni marcate". GGIC, 1, pp.129-239.

Dobrovie-Sorin, C. (1994) : *The syntax of Romanian ; comparative studies in Romance*. Berlin, Mouton de Gruyter.

Farcas, D. (1981) : "Word order in Rumanian main clauses". *Folia Slavica*, 4, 2-3, pp.254-262.

Fornaciari, R. (1881) : *Sintassi italiana dell'uso moderno*. → Ristampa anastatica. Firenze, Sansoni, 1974.

GA : Academia Republicii Populare Romîne, *Gramatica limbii romîne*. Bucureşti, Editura Academiei, 1963[2].

Gebert, L. (1988) : "L'ordre neutre des mots". W. Banyś & S. Karolak (éds.), *Structure thème-rhème dans les langues romanes et slaves*, pp.139-149, Wrocław, Zakład Narodowy Imienia Ossolińskich Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.

GGIC : L. Renzi *et al*. (a c. di), *Grande grammatica italiana di consultazione*. Nuova ed. Bologna, Il Mulino, 2001.

Gierling, D. (1997) : "Clitic doubling, specificity and focus in Romanian". J.R. Black & V. Motapanyane (eds.), *Clitics, pronouns and movement*, pp.63-85, Amsterdam, John Benjamins.

Graur, A. (1960) : *Studii de lingvistică generală*. Variantă nouă. Bucureşti, Editura Academiei.

Greenberg, J.H. (1963) : "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements". J.H. Greenberg (ed.), *Universals of language*, pp.58-90. Cambridge Mass., M.I.T. Press.

Lepschy, L. & G. Lepschy (1998[4]) : *La lingua italiana ; storia, varietà dell'uso, grammatica*. Milano, Bompiani.

Manoliu-Manea, M. (1990) : "Case markers and pragmatic strategies ; Romanian clitics". W.U. Dressler *et al*. (eds.), *Contemporary morphology*, pp.183-196. Berlin, Mouton de Gruyter.

Motapanyane, V. (1989) : "La position du sujet dans une langue à l'ordre SVO/VSO". *Rivista di grammatica generativa*, 14, pp.75-103.

Niculescu, A. (1991) : "L'ordine delle parole in rumeno" → "Ordinea cuvintelor în limba română". A. Niculescu, *Individualitatea limbii române între limbile romanice,* 3 : *Noi contribuţii*, pp.189-197. Cluj-Napoca, CLUSIUM, 1999.

Prince, E.F. (1981) : "Toward a taxonomy of given-new information". P. Cole (ed.), *Radical pragmatics*, pp.223-255. New York, Academic Press.

Renzi, L. (1984) : "La tipologia dell'ordine delle parole e le lingue romanze". *Linguistica* (Ljubljana), 24. pp.27-59.

Renzi, L. (1991) : "Considerazioni tipologiche sul rumeno". H. Stammerjohann (éd.), *Analyse et synthèse dans les langues romanes et slaves*, pp.21-25. Tübingen, Narr.

Salvi, G. & L. Vanelli (1992) : *Grammatica essenziale di riferimento della lingua italiana*. Novara, Istituto Geografico De Agostini.

Şerban, V. (1974) : *Teoria şi topica propoziţiei în româna contemporană*. Bucureşti, Editura Didactică şi Pedagogică.

鈴木信吾 (1986)：「イタリア語における無標の語順について」『イタリア学会誌』36, pp.102-121.

鈴木信吾 (2000)：「語順の自由度；イタリア語の場合」『言語』29, 9, pp.36-41.

Suzuki, S. (2001予定) : "I costituenti a sinistra e la contrastività in italiano antico e moderno". *Archivio Glottologico Italiano*.

Vanelli, L. (1986) : "Strutture tematiche in italiano antico". H. Stammerjohann (ed.), *Tema-Rema in italiano*, pp.249-273. Tübingen, Narr.

Vanelli, L, L. Renzi & P. Benincà (1985) : "Typologie des pronoms sujets dans les langues romanes". *Linguistique descriptive; phonétique, morphologie et lexique. Actes du 17ème Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes*, 3, pp.161-176.

L'ordre des mots dans les langues italienne et roumaine : à la recherche de sa valeur non marquée dans une perspective pragmatique

RÉSUMÉ

Shingo Suzuki

On considère généralement, du point de vue de la typologie linguistique, que les langues romanes appartiennent au type SVO. Mais récemment, quelques romanistes ont essayé de démontrer, avec des preuves assez convaincantes, que le roumain est du type VSO. Dans le présent article nous nous proposons de réexaminer l'ordre des mots dans la proposition principale des deux langues, en nous basant sur des phénomènes observés dans une perspective pragmatique.

Pour effectuer ce réexamen, nous analyserons d'abord l'ordre utilisé pour indiquer la relation grammaticale entre le S(ujet) et l'O(bjet direct) dans les deux langues. Ensuite nous essaierons d'établir l'ordre des mots non marqué dans chaque langue conformément au principe selon lequel on peut considérer une phrase comme pragmatiquement non marquée lorsqu'elle peut être employée dans un nombre plus élevé (théoriquement infini) de contextes. Et à la fin nous confronterons notre résultat avec celui obtenu syntaxiquement dans le cadre de la typologie linguistique.

Pour conclure, nous poserons que, aussi bien en italien qu'en roumain, l'ordre des mots non marqué verifié sous l'angle pragmatique est SVO. Si le roumain appartient typologiquement aux langues VSO, nous supposons que c'est à partir de cette construction qu'on en édifie une autre en thématisant le S : cet ordre SVO reconstruit avec S ayant une valeur thématique devrait être, dans la proposition principale roumaine, non marqué pragmatiquement.